

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380173

研究課題名(和文) 自民党総裁選出過程の変容とそのメカニズムの解明

研究課題名(英文) Research on the Transformation of the LDP Leadership Selection Process

研究代表者

上神 貴佳 (Uekami, Takayoshi)

岡山大学・社会文化科学研究科・教授

研究者番号：30376628

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目標は、事実上、日本の首相を決める、自民党総裁選のメカニズムを解明することにある。とりわけ2000年代に入ってから、毎回、党員投票が実施されるようになるなど、同党の総裁選には大きな変化が生じている。一方、国会議員の投票行動には変化が生じているのか否か、(生じているとする)どのような変化なのか、地道なデータの収集を通じて、その解明を試みた。現在、詳細な分析を続行中であるが、投票行動における派閥要因の低下が予想される。無派閥議員の増加など、派閥の拘束力低下をうかがわせる傾向と軌を一にする結果が得られるはずである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project is to investigate the transformation of LDP leadership selection process. Since the LDP is a dominant party, selecting the LDP leadership equals to the selection of PM of Japan. It seems that the LDP leadership selection process has experienced a large scale change since the early 2000s, which is typically represented by the regularly scheduled votes by party members. On the other hand, change in votes by the LDP diet members remain to be seen. This research collected the data on voting behavior of the diet members, and tried to clarify the extent of weakening factional influence.

研究分野：政治学

キーワード：政治学 現代日本政治論 政治制度 政党研究 自民党 総裁選

1. 研究開始当初の背景

本研究の先行研究(自民党総裁選出過程の研究 2000年代の変化を中心に)では、十分に解明できなかった点に焦点を絞って研究するために、本研究を構想した。

先行研究(自民党総裁選出過程)では、2000年代以降の自民党総裁選において、党員投票が頻繁に用いられた点に着目し、とくに県連単位での分析に重点を置いた。しかし、党員と並ぶ重要な有権者である同党所属の国会議員に関する分析は未着手であった(先行研究ではパイロット調査のみを実施した)。このことが、本研究を開始する背景である。

2. 研究の目的

先行研究に引き続き、本研究の目的は、2000年代以降に顕著となる自民党総裁選の変化のメカニズムを解明することにある。本研究では、自民党所属国会議員の投票行動、これらの属性の変化を明らかにする。

3. 研究の方法

1990年代以降の自民党所属衆参議員の総裁選挙における投票行動を対象として、新聞記事データベースを用いて個別に特定していく。議員を単位とする投票行動のデータベースが作成し、分析する。

1990年代以降、自民党総裁選は計16回、実施されている。その内、複数の候補者が立候補することにより、競争選挙となったのは下記の表における計12回である(が付いている事例)。

総裁選データの収集対象(競争選挙となった事例 =)

1990年代以降における自民
党総裁総裁選出事例

- 1991年10月
- 1993年7月
- 1993年9月
- 1995年9月
- 1997年9月
- 1998年7月
- 1999年9月
- 2000年4月
- 2001年4月
- 2001年8月
- 2003年9月
- 2006年9月

2007年9月

2008年9月

2009年9月

2012年9月

また、これら議員の属性についても既存のデータベース(丸善DB)を補完することで、時系列的に分析可能なデータセットを構築する。

4. 研究成果

1990年代以降の自民党総裁選について、同党所属衆参議員の投票行動に関するデータセットを完成させた(1991年10月、1993年7月、1995年9月、1998年7月、1999年9月、2001年4月、2003年9月、2006年9月、2007年9月、2008年9月、2009年9月、2012年9月の計12回、先に掲げた表を参照)。

確認作業やクリーニング作業をほぼ終了し、計量分析用ソフトウェア形式へのデータの変換、基礎統計の算出などを実施中である。分析結果については、国際学会での報告を想定している。

本研究に関連する成果として、自民党の制度化に関する研究報告を国際学会で行った(下記5を参照)。自民党内派閥の弱体化と自民党の制度化が主要なテーマである。

関連成果ではあるが、今後、上記成果で整備されたデータセットを用いて分析を進めていく上で、極めて重要な知見を得ることができた。それらの成果に限定して報告し、インプリケーションを述べる。

< 関連成果からの研究本体に対するインプリケーション1 >

自民党の無派閥を説明する2項ロジスティック回帰分析 binary logistic model によると、自民党が大勝利を収めた2005年と2012年においては、新人候補者は無派閥を選択する確率が有意に高い(2005年、2012年)。派閥のリクルート機能が低下していることを伺わせる。

こうした変化は、派閥所属の有無を通じて、自民党総裁選における議員の投票行動に影響を及ぼすと予想できる。

今後は総裁選における投票行動と派閥選択を同時に推定する二段階のモデルとして定式化し、計量分析を実施する予定である。

Binary logistic regression analysis with no factional affiliation as the dependent

variable

		2005	
		Coef.	
Policy			
Con		.032	
Small gov		.028	
PR win		.125	
DID		.127	
Newcomer		3.321	***
Elected >7		.019	
Constant		-2.100	***
<hr/>			
N		273	
-2 log likelihood		221.36	
Nagelkerke		.491	
R-sq			

***: p<.01, **: p<.05, *: p<.1

		2012	
		Coef.	
Policy			
Con		.360	
Small gov		.436	*
PR win		.074	
DID		-.731	
Newcomer		.790	**
Elected >7		.449	
Constant		-.439	
<hr/>			
N		272	
-2 log likelihood		352.03	
Nagelkerke		.061	
R-sq			

***: p<.01, **: p<.05, *: p<.1

詳細は、下記 5 に掲載した報告論文の table4 を参照のこと。本報告書では、紙幅の制約から、2003 年と 2009 年の分析結果を省

いている。

< 関連成果からの研究本体に対するインプリケーション 2 >

また、総裁に対する支持（2005 年）、感情温度（2012 年）を説明するモデルの分析結果によると、興味深い変化が見られる。2005 年においては、「小さな政府」を好む議員は小泉総裁を支持する傾向が有意に認められるのに対して、2012 年においては、「小さな政府」を好む（好まない）議員は安倍総裁に対する感情温度が低くなる（高くなる）傾向が有意に認められる。つまり、2005 年と 2012 年では総裁の政策志向が異なっており（小泉構造改革路線とアベノミクス）、それに対する賛否が総裁に対する評価と結びついているのである。

過去においては、もっぱら派閥間のパワーゲームとして理解されてきた自民党総裁選であるが、現在は議員の総裁候補者に対する政策的な評価が投票行動においても重要となっている可能性がある。

今後は総裁選における投票行動を推定するモデルにおいて、政策的な評価を説明変数として加えて、計量分析を実施する予定である。

Binary logistic regression analysis with support for the LDP leader as the dependent variable

		2005	
		Coef.	
Constant		-0.397	
Policy			
Con		0.306	
Small gov		0.611	***
PR win		0.674	
DID		1.105	**
Faction			
leader's		0.779	*
Independ		-0.293	
Newcomer		-0.058	
Independ *		0.908	
Newcomer			
<hr/>			
N		270	
-2 log likelihood		271.027	

likelihood
Nagelkerke .173
R-sq

***: p<.01, **: p<.05, *: p<.1

Regression analysis with emotional temperature towards the LDP leader as the dependent variable

2012	
	Coef.
Constant	84.966 ***
Policy	
Con	4.012 ***
Small gov	-2.239 **
PR win	-1.827
DID	2.483
Faction	
leader's	2.390
Independ	1.783
Newcomer	-1.685
Independ *	0.675
Newcomer	
N	221
Adj. R-sq	0.052

***: p<.01, **: p<.05, *: p<.1

詳細は、下記 5 に掲載した報告論文の table6a, 同 6b を参照のこと。本報告書では、紙幅の制約から、2003 年と 2009 年の分析結果を省いている。

5 . 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

Uekami, Takayoshi, and Hidenori Tsutsumi. Inverse Relationship between Party and Party System Institutionalization: The Transformation of Postwar Japanese Party Politics. ECPR Joint Sessions of Workshops.

2016 年 4 月 24 日 ~ 28 日. Pisa, Italy.
Available at
SSRN: <https://ssrn.com/abstract=2698060>

Uekami, Takayoshi, and Hidenori Tsutsumi. Inverse Relationship between Party and Party System Institutionalization: The Transformation of Postwar Japanese Party Politics. The Workshop on Institutionalization and Deinstitutionalization of Party and Political Organizations. 2015 年 11 月 20 日. Kaohsiung, Taiwan.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
該当なし

6 . 研究組織
(1)研究代表者
上神 貴佳 (UEKAMI, Takayoshi)
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：30376628

(2)研究分担者
堤 英敬 (TSUTSUMI, Hidenori)
香川大学・法学部・教授
研究者番号：20314908

(3)連携研究者
該当なし

(4)研究協力者

該当なし